

書評 田中教子著『斎藤茂吉』

声調に見る伝統と近代』

吉海 直人

象に据え、学位論文を書き上げた次第である。

縁あつて同志社女子大学の寺川真知夫教授（現在名誉教授）の指導を受け、さらに寺川教授が退職された後は吉野政治教授（現在名誉教授）の指導を受けたことから、語彙による研究、特に外来語の翻訳語という視点が確固たるものとなっている。それを万葉研究や茂吉研究に応用しているところに、田中論の独自性・斬新さが認められる。

本論文で最も目を引いたのは、「物理学」という語の使用である。これは茂吉の万葉評語彙としての「屈折」等が、古来の日本語の意味ではなく、明治以後に西欧から輸入された物理学用語の翻訳語として用いられているとしており、これには非常に驚いた。

また茂吉が歌作のために学んだのは、人麻呂を核とする『万葉集』であるが、その評論を執筆する過程で、むしろ従来は評

一

田中教子氏は、アララギ派に所属する気鋭の歌人であり、二〇〇八年には歌集『乳房雲』で名誉ある中条ふみ子賞を受賞されている。その後も『空の扉』（ながらみ書房）、『中つ国より』（文芸社）と順調に第三歌集まで出版されている。

また歌作のためにと『万葉集』の研究を志し、奈良女子大学大学院で研鑽を積んでいる。これまでに『ことのはしらべ万葉集と現代短歌』（文芸社）や、『覚醒の暗指―現代短歌の創造的再生のために―』（ながらみ書房）などの著作もまとめておられる。そういった研鑽の中から、近代の歌人と『万葉集』のかわりに目を向けられた。そして『万葉集』評論と実作を融合させている斎藤茂吉に辿りつき、茂吉の万葉評語彙を研究対

価の低かった歌のよさを発掘（再評価）し、それを積極的に自
作に応用している点を論じているところは、旧来の万葉研究者
の研究とは視点を異にした、歌人ならではのユニークな視点
（感性）であろう。

本論文は、茂吉の万葉研究に新たな光を当てたのみならず、
さらにそれが茂吉の実作に応用されたことを論証しようとして
いる点、独創性に富んでおり、その研究成果のみならず、新た
な研究の切り口を提示したものと評価される。ただし茂吉
の作歌活動は長く行われているので、この切り口だけで茂吉の
全てを論じ切れるわけではあるまい。今後引き続き研究を進展
・深化させていってほしい。

以上が田中氏の学位請求論文「斎藤茂吉の万葉集評価語彙と
物理学など―その作歌への応用―」に対する私（副査）の講評
の概要である。その学位論文が、このたび『斎藤茂吉 声調に
見る伝統と近代』というタイトルで出版された。まことにおめ
でたいことである。心から田中氏にお祝いを申し上げたい。

二

早速、学位論文がどのような一書にまとめられているのか、
両者の比較を通してその過程を分析してみたい。まず本書の目
次を紹介しておこう。

はじめに

第Ⅰ章 声調の「ゆらぎ」とは何か

第Ⅱ章 声調の「屈折」とは何か

第Ⅲ章 ヨーロッパアーリーモダンリズムから「屈折」への

影響

第Ⅳ章 茂吉の後代への影響―「屈折」を中心に―

第Ⅴ章 声調の「波動」とは何か

第Ⅵ章 声調の「圧搾」と「顫動」とは何か

あとがき・参考文献

本書の構成は以上のようになっている。短い「あとがき」を
見ると、「今回の出版にあたっては、タイトルと章立ての変更
および新たに第Ⅱ章第Ⅲ章を中心に増補を加えた」と記されて
いた。なるほど学位論文と本書ではタイトルが大きく違ってい

る。学位論文では「評価語彙」「物理学」とストレートにキーワードを出していたのに対して、本書ではそれを「声調」に置き換えている。私は「など」が気になったが、それも解消されている。

タイトルの変更は自ずから目次の変更と連動している。あらためて学位論文と単行本の目次を比較してみると、論題がかなりわかりやすい用語に修正されている。そのことは目次に「声調」と「何か」が対として多用されていることによって明らかである。これによって研究書というより、一般向けの評論・解説書のような雰囲気を漂わせている。もちろんわかりやすいのは、読む側にとってはありがたいことであるし、二五〇〇円という定価の安さも評価に値する。

さらに詳しく目次を分析すると、学位論文では第一章が「屈折」、第二章が「ゆらぎ」論であった。また第三章が「波動」、第四章が「圧搾」、第五章が「顫動」だったので、大きく入れ替わっていることがわかる。続く第六章は未来派、第七章は後代への影響だったことから、全体の章立てが一つ少なくなっている計算になる。これは独立していた「圧搾」と「顫動」を一章にまとめた結果であろう。その理由は、「圧搾」と「顫動」

が必ずしも茂吉の成功例として論じられていなかったからではないだろうか。

もう一つ見逃せないのは、田中氏の声調論でもっとも重点的に論じられているのは「屈折」だということである。そのことは第二章の分量が多いだけでなく、第三章・第四章も「屈折」論になっていること、その第二章と第三章が単行本でさらに増補されていることから容易に読み取れる。このことは本書の特徴として押さえ置いてよさそうである。言い換えれば、本書の核は「屈折」論ということになりそうだ。

三

続いて各章を一つずつ吟味していきたい。まず第一章の「ゆらぎ」についてはどうだろうか。前述のように、学位論文では第二章にあつた「ゆらぎ」論が、単行本で第一章に据え直されたことの意味は何であろうか。それについて田中氏は「はじめ」で、「声調としての「ゆらぎ」は、他の声調に比較して特に実作が概念の明確化にいちじるしく先行している」（10頁）とされながら、直後に「声調としての概念の確立がかなり遅れ

る」とも述べられている。

そのことは28頁でも、「こうした語の使い方は論としては未整理と言わざるを得ない」と断じている。そして「おわりに」(33頁)まできて、茂吉の中の「ゆらぎ」が、必ずしもブラウン運動(物理学)で統一されていないとも述べておられる。田中氏は正直に告白されているのだから、わざわざ本書の第1章に「ゆらぎ」論を置いた戦略は、必ずしも成功しているようには読めなかつた。

次に些細なことだが、第1章の21頁に「をとめ等が袖振山」歌が引用され、その序詞について、

「袖振る」と地名の「布留」が同音で掛詞となり、布留山へと意味が転換

云々と分析している点、田中氏は『万葉集』の技法として「掛詞」を認める立場なのかどうかを尋ねてみたい。枕詞や序詞の場合、必ずから同音の言葉を導き出すことが多いので、あえて意図的な技法としての掛詞を持ち出す必要はないと思うからである。

そのことは田中氏も24頁で、

茂吉のいう声調の「ゆらぎ」には正確には掛詞とは言えな

いが、掛詞に類似した表現をとらえるものもある。

と述べている。「掛詞とは言えない」とあるように、「さ夜中」と「歌にいわゆる掛詞は認められない。「空」が聴覚と視覚を結んでいることは間違いないが、それをあえて掛詞にこだわって論じるのは、かえって読者に誤解を生じさせる恐れがある。

どうやら田中氏は「掛詞」がお気に入りらしく、33頁の「おわりに」でも「掛詞の連想によつて歌意が予想外の方向へ移動し適応しつつ結句に至るものである」と主張しておられる。しかしながら茂吉の実作にも、いわゆる掛詞はほとんど用いられていないのではないだろうか(近代短歌では当たり前)。あえて『万葉集』論で掛詞を多用・強調する理由がよくわからなかつた。

なお24頁に引用された「さ夜中」と「歌について、田中氏は「結句は空の月が低くなりかかつて夜が明けようとしている様となる」と分析している。しかし歌には「夜は深けぬらし」とあって、その根拠が「月渡る見ゆ」なのであるから、たとえ月が西に沈もうとしていたとしても、それは決して夜が明ける兆候にはならない。というのも、太陽と違って月の運行は、日々時間がずれているからである。

四

次に第Ⅱ章だが、本書の中で「屈折」が最重要視されていることは前に述べた。ここで気になったのは40頁以下で「腰折」をキーワードにしていることである。というのも、歌論用語としての「腰折」は、平安時代以降のものだからである。それを『万葉集』に援用するのは適切とは思えない。という以上に、誰も万葉歌を「腰折」という語では論じていないはずである。他に「曲折」などもあげられているが、これも戦略としてうまくいっているとは思えなかった。やはりここは「屈折」に徹して論じるべきではないだろうか。

また引用されている万葉歌を見ると、41頁の「白浪の」にも43頁の「あなし川」にも末尾に「らし」が用いられている。これは根拠のある助動詞とされているものであるから、当然「らし」のついている歌は、上の句と下の句に因果関係があると見るべきであろう。「あなし川」歌など、下流の波の様子が普段と違っているのを見て、目には見えない上流の雨雲（天候）を予想しているのであるから、明らかに因果関係ははっきりして

いるはずである。この歌を「屈折」の好例とすべきかどうか、再考の余地があるように思われた。

また67頁の「のどあかき」歌についても、ツバメが巢作りをするというのは、卵を産んで雛を育てるためである。となると片や生命の誕生、片や生命の終焉で見事に対になっている。一見、上の句と下の句に因果関係はなさそうに見えるが、その実、命の問題として深く関わっていることは、たとえ「屈折」の理論を用いなくても、容易に読み取れるのではないだろうか。これは単なる見解の相違なのかもしれないが、田中論で取り上げるべきは、本当に両者に因果関係のない歌のはずだから、その見極めを厳密に行なっていたきたい。

第Ⅴ章は「波動」論だが、大半は長歌について論じられているので、「波動」論は長歌にこそ有効であり、短歌にはあまり有効ではないという印象を受けた。できれば短歌についての有効性をもっと強調していただきたい。

また第Ⅱ章で「波動論的句法」と「屈折」の技法の重なりが指摘されていたが、これについて田中氏はどのように関連付けているのかをうかがいたい。その上で、「波動」について162頁で「ともしびの」歌の「ラム」と「ナム」を「波動」としてお

られるが、たつたそれだけの根拠で論じるのは無理があるので
はと感じた。その程度の「波動」なら、99頁の「屈折」論にあ
げられていた茂吉の歌など、ほぼ全て「波動」の例と見てもよ
さそうである。特に「たたかひは」歌など、「起り居たりけり」
「散り居たりけり」と繰り返し返されているのだから、こういった
重なりを有する歌をどのような物差しで分類・処理されている
のか、その点を明白に（素人にもわかるように）していただき
たい。

同様のことは「ゆらぎ」でもいえる。「ゆらぎ」論で引用さ
れていた「子等が名に」歌には「か」が四回も用いられてお
り、十分「波動」の例になりうるからである。「屈折」と「波
動」のみならず、「ゆらぎ」と「波動」の重なりについて、と
いうより声調の重なりについて、複合的・重層的な分析・視点
が必要であろう。

なお田中氏は「おわりに」でやや唐突に、「このような「波
動」こそ、和歌の声調の基本であり」（170頁）と述べられてい
る。この「基本」の中身は、『万葉集』以降の平安朝和歌の伝
統も含まれているように読めたが、それなら声調論は、『万葉
集』と茂吉の評価語彙だけでは論じ尽せないことになる。欲張

らずにまずは本書で論証したことを結論としてまとめていた
きたい。

五

最後に全体的な感想を記しておく。これはあくまで『万葉
集』にも近代短歌にも疎い門外漢の私の素朴な感想（印象批
判）である。そもそも医者であるから、医学用語ならず
んなり納得できる。では茂吉は物理学用語をどのようにして学
んだのだろうか（学校？独学？）。それに関連してアインシュ
タインや石原純や物理の教科書の翻訳などが紹介されている
が、その指摘だけで証明されたことになるのだろうか。また物
理学の用語導入にはタイムラグがあつて、「ゆらぎ」など同一
時点では扱えないことも気になった。素人の読者のために、是
非時系列に沿った説明も加えていただきたい。

その上で、たとえば茂吉が物理学用語に暗い歌人や読者に、
ブラウン運動などの物理学用語を用いて説明しても、その意図
は伝わりにくかった（伝わらなかつた）はずである。一般に浸
透している熟語の場合、その意味・用法の区別は容易にはつけ

がたい。そう考えると茂吉の説明は、一般の歌人や読者にすんなり受け入れられたとは到底思えない。だからこそ「難解」とされたのであろう。それでも学究的な『万葉集』の評価だけなら納得できないことはないのだが、それがさらに茂吉の歌に及んだ途端、すつきり納得できなくなってしまうのである。

また茂吉の作歌活動は長期に及んでいるので、生涯に詠んだ歌の数も膨大なものである。そういった全体の中で、田中論は茂吉の歌のどれくらいをカバーできるのだろうか。言い換えればこの方法は、茂吉研究にどの程度有効なのだろうか。本書の筆勢では、茂吉の短歌は『万葉集』抜きには成り立たないようにも読めるが、果たして『万葉集』とかかわらない歌はそんなに少ないのだろうか。これこそ素人の浅はかな感想である。

ここまで来て、第一歌集『赤光』成立の時点で、田中論がどれだけ有効なのかが気になってきた。田中氏は「はるばると」歌について、「茂吉にとっては「腰折」の概念を打ち破る以前の作であるが、「屈折」の萌芽と見てよい」（66頁）としておられる。

『赤光』に茂吉の名歌が多く含まれていると私は思っているが、とすれば万葉評論から学んだことを歌作に応用したこと

は、かえって茂吉の歌を平凡なものにした（理屈っぽくした）とは言えないのだろうか。声調論は必ずしも名歌・激情的な歌を生み出す秘密兵器ではなかったのではないか。本書の主旨からは離れてしまうが、これが私の正直な感想（妄想）である。素人考えであることは承知しているが、文学（歌作）に進化論は当てはまらないというのが私の持論なので、あえて問いかけてみた次第である。藤原定家にしても、歌を詠まなくなった頃に古典の書写や注釈を行っている。

もともと本書は、茂吉の万葉研究と実作を通して、それを自身に重ねられたものと思われる。とすれば田中氏の研究成果は、今後の田中氏の短歌実作に豊穡な果実をもたらすに違いない。研究と実作の両立に向かう田中氏の今後の活躍を楽しみにしている。辛口の書評になったことをお詫びする。

（二〇一九年七月十五日発行 B 6版 二四三頁 二五〇〇円 作品社）